

ドクニンジン

概要

和名（科名）	ドクニンジン（セリ科）
英名	Poison-Hemlock
特徴	<p>葉は、2～3回羽状に分裂し、葉柄の根元にひれがついている。夏には小さな白花を複合散形（傘が開いたような形）につける。茎高70～180cmになる二年草である。全体に光沢があり、紫紅色の斑点が植物全体にみられる。臭いは重い不快臭がある。花後、長さ3mm前後の橢円形の果実を結ぶ。果実に毒成分が多い。</p> <p>ドクゼリに対比すべき有毒植物で全草有毒。山菜として利用されるシャク（セリ科）は山地の陰地に多く自生する多年草で、これと間違つての中毒が、札幌市において報告されている。シャクは野菜の人参のような香りがあることで区別できる。</p>
有毒成分	アルカロイド（コニイン）
分布	ヨーロッパ原産の植物であるが、全国的に帰化植物として雑草化が報告され、分布域が広がっている。

毒性

部位	種子を含む全草
毒性	強毒
食用の可否	×

(写真)



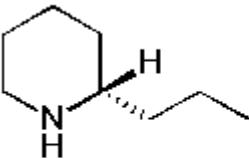
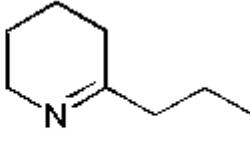
ドクニンジン

詳細

1 特徴

一般名	ドクニンジン
英名	hemlock, poison-hemlock
学名	<i>Conium maculatum</i> L.
分類	セリ目 Apiales、セリ科 Apiaceae、ドクニンジン属 <i>Conium</i>
生育地	ヨーロッパ原産。中国、北アフリカ、北アメリカに帰化し、日本では全国的に拡大しつつある。北海道では、札幌市近郊の土砂捨場、または隣接する牧草地への進入が見られる。
形態	<p>草丈 70~180 cm になる二年草。根は円錐形で肥厚する。茎は中空で太く、上部は分枝して広がる。葉は 2~3 回羽状複葉。小葉は卵状皮針形、長さ 1~3 cm、さらに深裂する。茎、葉柄に紫紅色の斑点があり、植物全体に光沢がある。</p> <p>花期は 7~9 月。大形の復散形花序に白色五弁の約 3 mm の小花をつけ、花の先端は内に曲がり、その中の 1 枚だけが大きい。</p> <p>果実はほぼ球形で、直径は約 3.5 mm、熟すると 2 分果に分かれる。</p>
	  
	<p>ドクニンジンの花</p> <p>ドクニンジンの花</p>
	 
	<p>ドクニンジン</p> <p>ドクニンジンの果実</p> <p>シャクの花</p> <p>シャクの果実</p>

2 毒性成分情報

毒性成分	コニイン coniine、 γ -コニセイン γ -coniceineなどのアルカロイド
	 coniine
	 γ -coniceine
中毒症状	全草、果実に有毒成分を含み、食べると恶心、嘔吐、流涎、昏睡を起こす。
発病時期	30~40分
発生事例	(症例) 1997年4月札幌市内において、山菜のシャク(山ニンジン) <i>Anthriscus sylvestris</i> (L.) Hoffm.と間違えて、ドクニンジンの若芽を茹でてお浸しにして食し、中毒した。
中毒対策	ドクニンジンの分布が広がっていくと、山菜のシャクの生育地と競合する可能性が生じる。

3 その他の参考になる情報

その他	古代ギリシャでは、このエキスを罪人処刑(毒殺)に用いていた。哲学者ソクラテスが、この毒によって最期を遂げたことは有名。 北アフリカ原産の同属のドクパセリ <i>C. chaerophylloides</i> (Thunb.) Sond.も含めてドクニンジンと総称することもある。
間違えやすい植物	山菜として食用になるシャク(コシャク)に似ているため誤食の可能性もあるが、植物全体に不快な臭氣があり、紫紅色の斑点で識別できる。